

都 退 教 協 だ よ り

No.288号

2019年2月20日発行

東京都退職教職員協議会 会長 柴田 廸春

〒101-0003 千代田区一ツ橋 2-6-2 日本教育会館 2F 東京教組内

☎:03-5276-1311 FAX:03-5276-1312 Mail:totaikyokyo@tokyokyouso.org

4月から年金が0.1%上がります。

私たちの年金は、物価と賃金の動向によって改訂されます。厚生労働省は、1月18日、今年の年金改定率を公表しました。

今回、物価変動率は、プラス1.0%でしたが、名目手取り賃金変動率がプラス0.6%でした。この場合、低い方の賃金変動率を年金の改定率に適用します。

しかし、年金が改訂され上昇する場合、マクロ経済スライド（次世代の年金確保のため

に年金を段階的に低く抑える制度）が適用されます。2019年度のマクロ経済変動率のマイナス0.2%と昨年度までのマクロ経済スライド変動率の繰り越し分マイナス0.3%が適用されます。

従って、 $0.6 - 0.5 = 0.1$ となり、わずか0.1%の増になります。平均的な世帯で月額300円足らずの増額です。

お花見のお誘い

雪がちらつき、インフルエンザも流行しましたが、梅の香に春の訪れを感じる季節になりました。恒例の「お花見の会」を下記のとおり行います。

コースは、最近お花見の名所になってきた目黒川を散策します。今年も都高教退職者会と合同で行います。皆さん奮ってご参加ください。

日 時 4月3日（水）午前11時

集合場所 JR大崎駅・南改札口



※例年通り、花見のあと、2~3000円の予算で懇親会を開きます。

皆さまの参加をお待ちしています。

当日の連絡は、柴田会長 090 - 6700 - 7087

谷口事務局長 090 - 5202 - 0117

福島原発事故から7年半 福島の現状は・・・。

第3回 日退教 福島学習の旅（2018年11月25日～26日）

藤崎喜仁

2011年3月11日の東日本大震災及び翌日の福島第一原発事故から早くも七年半が過ぎた。

日退教は第3回目の「福島学習の旅」を2018年11月25日～26日に実施した。各県から40名の参加があり、飯坂温泉の「あづま荘」を会場にして学習会と交流会が行われた。

一日目は柴口正武さん（浪江中学校教諭・前福島県教組副委員長）の「避難校からみた原発震災～教育実践を通して～」報告だった。

《福島の現状》

福島県の東半分はセシウム137が3万ベクレル以上とのこと。半減期は30年だが今後劇的に下がることはない。「放射線管理区域」が4万ベクレル以上なので、福島県東部はそれと同じ水準。これがあと25年も続くと云う。

双葉地方は2011年3月11日の大震災で半径2Km圏内の避難指示が出された。それが原発事故で4月末には放射線による「警戒区域」

「避難区域」が半径20Km圏内に設定された。その後の7年間で川内村や南相馬市・楡葉町など避難区域の解除があり、2017年4月には、富岡・浪江・飯館・川俣町山木屋地区なども避難指示が解除された。しかし、避難先での7年に渡る生活や故郷の状況を考えると、「戻る」選択をする世帯は少ない。

《学校再開の道は》

学校再開も同様である。2011年3月に休校になった学校。4月から間借りをして再開した学校や2校3校合同で授業を再開した学校。通学や通勤に児童・生徒も教職員も辛酸をなめる苦労の連続だった。しかし、それが避難解

除になって住民の帰還があっても、児童・生徒も戻り学校の再開には直ぐには繋がらない。震災や原発被害で当時の児童・生徒は「全員」一度は転校をしている。避難先の推移で3～5回の転校を繰り返す子もいる。そこでの環境の変化や福島からの避難者ということが、言葉の「差別」や「いじめ」に繋がり不登校にもなっている。「賠償金」「どこ出身」「福島」などの言葉に敏感になり、精神的に追い詰められる深刻な問題も起きていると報告された。

《浪江町の学校は・・・》

2018年度は富岡町・浪江町・葛生村・川俣町・飯館村で、地元での授業再開や学校の新設などがあつた。浪江町は浪江小・中学校を二本松市に残したまま、町に「浪江創成小・中学校」



を開校した。浪江中学校は生徒数4人（2年1人 3年3人）、浪江創成中学校は生徒数2人（1年1人 特支1人）だ。浪江中は二本松市の仮校舎にある。2つの学校とも、校長以外の教員は教頭を含めて各5人が授業を持っている。一つの学校で5人しか教科担任がいない

ので、2つの学校を兼務している教員が4人もいる。移動距離は50Km以上もある。また、浪江創成中の数学・英語・音楽は、浪江創成小学校の教員が授業をしている。

2018年4月新設開校した「浪江創成小学校・中学校」は同じ校舎内であり、小学生は8人だ。建物はとてつもなく立派だが教員の配置は不備だらけで無計画だと。学校を2つに分断した結果が、教員の数を激減させ過剰で過酷な労働を余儀なくさせている。

《富岡町の学校は・・・》

富岡町も同様だ。富岡一小・二小と富岡一中・二中の学校名を残したまま、三春町の仮校舎（小学生14名・中学生10名）と富岡一中の校舎（小学生10名・中学生4名）で並行して授業を再開した。浪江と同じく4人の三春校の中学校教員が75Kmも離れた富岡の校舎に週一通勤。また二つの中学校に国語と数学教員の配置は一人だけ。授業が組めず「ライブ授業」と称しテレビ会議システムで両校をつないで授業している有様だ。

《避難校での二つの教育実践》

〈総合的な学習の時間から〉

浪江中学校では「ふるさと浪江」をテーマにして、学年ごとにふるさとを「知ろう」「学ぼう」「生かそう」と総合学習を進めている。避難先の学校で「戻れないふるさと」にどう向き合い考えさせるか難しいテーマだったと云う。中一では「ふるさと浪江」の記憶をたどり思い起こす。中二は職場体験で「ふるさと」を知る活動だ。その際「ふるさと」を「本来のふるさと浪江」「それぞれの避難先」「学校のある地域」の三つに分けた。三つのふるさとを調べ考えて学習を進めて、職場体験の場所は学校のある地域（二本松市針道）の事業所にした。生徒数は3人。雑貨店と薬局で2日間職場体験をした。雑貨店の地域の役割を調べ、それを「ふるさと浪江」に繋げていく。震災前の浪江町と現在の町の復興状況と比べ合わせて学習を進めた。2016年の文化祭で当時の3年生は、震

災後の体験を出し合い5年半を振り返り、未来に向かって歩いていこうという思いを紙芝居で発表した。

〈道徳の時間から〉

福島の各学校は3.11を中心に「東日本大震災」に関する行事を行っている。浪江中では、「全校道徳」の形で原発事故の避難生活を中心にした取り組みをしてきた。柴口さんは避難先でのいじめ、放射能の無理解からくる差別、悪意のない傷つける言葉などから教材を作り授業をしてきた。また、柴口さん一家が避難先に向かう途中、雪のため走行が危険になり、ある福祉施設の守衛さんの好意で一夜をロビーで過ごさせてもらった体験も教材にした。

子どもたちが今おかれている福島の現状や状況をどのように受け止めさせるのか、考えて話し合う中から、人の弱さ強さも含めてくじけず生きていくメッセージを与え続けている柴口さんの素晴らしい実践と感じた。

《二日目はバスでの現地視察》

今回も竹中柳一さん（福島退教・元県教組委員長）の案内で川俣町から国道114号を通り飯館村にバスで向かう。福島県教組から借りた線量計で測定しながらバスは進む。道路も来るたびに整備され、行き交う車の数も増えている。道の両側には積み上げられた無数のフレコンパックの山が、否が応にも飛び込んでくるが、放射線量もまた高くなっていくのも分かる。

《旧飯桶小学校から新生飯館小中学校》

途中、旧飯桶小学校で下車。校門の脇には昨年建設途中だった大きな民家が完成していた。

また、道の反対側には飲食店も開業し暖簾が下がっていた。校舎はいずれ壊される予定で背の高い草木が目立った校庭は、今は草木も無いが放射線量は依然として高い。高いのに周辺では人々の営みが始まっている。三年前とは大違いだ。

飯館村は2017年3月末で全村避難解除された。政府の対応は、「住むのは構わないが危険かどうか分からない」「住みたければどうぞ自由に」という程度の避難解除なのだ。

到底子どもが住めないことは明らかだ。

総額50億円の費用を要した「新生飯館小学校・中学校」を外から視察する。草野小・飯桶小・臼石小の三校35名で「新生飯館小学校」となる。「新生飯館中学校」は42名で開校。スクールバスで児童生徒は登校する。バスだけでなくタクシーの通学も。村内の自宅から通学する児童は僅か数名とか。殆んどは村外の避難先からの通学だ。一つの校舎で小学校三校が開校し校長は三校を兼務する。校舎と隣接している競技場のようなグラウンドやテニスコートは豪華すぎる。復興のシンボルとして華々しく開校した新校舎だが、敷地内は除染されたものの少し離れば依然として放射線量は高い。

《道の駅 まいでい館》

飯館村「道の駅=まいでい館」に着く。復興のシンボルとして2017年8月に開館した



が人は少ない。敷地中央には1600万円で制作依頼したオブジェ2体が目立つ。中は明るくコンビニ・軽食コーナー・売店・農産物直売所などある。購買が復興支援なので、会津塗りのお椀二つと直径10cm程の特大のシイタケを買った。線量計でセシウムは75ベクレル。家で焼いて食べたが美味しかった。

南相馬市に向かう。道の両側は整備され荒廃とした風景はないが、フレコンパックの山は相変わらず多い。東北に向かう高速道路も開通しバスターミナルも出来ていた。復興住宅建設や個人住宅建設で住民や作業員も増え、コンビニも次々と営業している。津波被害の多かった小高地区は、建物はなく海まで見渡

せる広々とした耕作放棄地にススキやセイタカアワダチソウが見える。

《浪江創成小・中学校》

浪江創成小学校・中学校を外から視察する。2018年4月開校した新校舎だ。浪江町は浪江小・浪江中を残したまま「浪江創成小学校・中学校」を開校した。とても立派な新校舎だが、小学生8名、中学生2名しかいない。浪江小1名・津島小2名の学校はいずれ廃校にする予定で、浪江中は生徒が4名だ。また臨時休校していて再開出来ない6つの小中学校も近々廃校にする予定で、浪江町は「浪江創成小学校・中学校」だけになる。この新校舎にどれだけの児童・生徒が来るのだろうかと考えるとなぜかため息が出てしまう。

《請戸小学校に向かう》

そこからバスは海が見える海岸線を走る。フレコンパックの山々とススキの原っぱが続き、その周辺は重機がせわしく動き土地の区画整理の工事が始まっていた。しばらく進むと原っぱの中に大きな荒廃した建物が見えた。これが請戸小だ。バスを降りて壊れたアスファルトの道をしばらく歩く。階段状の建物は津波監視棟なのか、大きな時計が14:44分で止まっている。校舎は津波被害の痕跡を多く残していたが、二階の窓は割れていない。

《案内人の加納さんから話を聞く》

3月11日は児童94名が在籍し体育館で卒業式の練習をしていた。



14:46に地震発生がした。請戸小学校は海岸線から300mの近さである。校長の「直ぐに避難」の判断で、14:56分には避難開始した。94名の2年～6年児童と教職員は励まし合いながら1.5Km先の大平山(請戸城跡)を目指して歩いて逃げた。15:35分に保護者対応で遅れ

た校長・教頭が合流。15:38分に大津波が校舎を襲いかかり、15:40分に大平山に津波が到達する。16:00に全員の無事を確認し山道から国道を目指す。渋滞した国道脇を歩くことを避けて、より高い山道を歩き続ける。その後、ダンプカーに全員乗せられ避難所にたどり着いたという。地震発生から僅か10分で避難出来た背景には、数日前に大きな地震があり避難経路の確認や、何かあったら直ぐに逃げる事など日常的に地域住民との繋がりがあったことが語られた。また避難経路は本当に正しいのか、日頃の確認や「いざ」と云う危機に遭った時、どう臨機応変に対応出来るか問われると思った。請戸小は震災遺構として残すことになった。震災時小学生だった子供たちも大学生になり、その人達にも参加してもらってどのように残すか話を進めていると云う。維持管理にはお金もかかるが、その現状を有りのままに見てもらい考えてもらうことが大切と語ってくれた。

《復興を感じる浪江駅前》

浪江駅に着く。浪江から原ノ町駅まで開通したためか、駅前には一軒珈琲店もできて更地だった場所にはマンションが建っていた。その側には廃墟の家や更地が混在しており、



違和感のある風景はまだ残っている。しかし、無人だった三年前と比べ人の生活を感じる駅前

前になっていたが、商店街の復興の兆しは見えないままだ。原発事故で全町避難となり、休校となっている浪江小学校も視察した。建物は壊れていないが校舎の中は、2011年3月11日のままだ。いずれ廃校になる。

《帰還困難区域は高線量で人は住めない》

そこから、バスは福島駅に向かう。雑木林が

連なる県道114号線の帰還困難区域に下車し線量を測った。道路脇の落ち葉の上に線量計を置いたとたんに、狂ったような速さで数値をカウントしていく。なんと24000ベクレルの数値で止まった。除染されていない手つかずの森林は、こんなにも大量の高い放射性物質をため込んでいたのかと恐ろしくなった。

旧津島小中学校があった地区を過ぎた平和公園と呼ばれる場所も13800ベクレル。とて



も人が住める環境ではない。川俣町に進むにつれ空間線量も下がってきた。人の住んでいる気配も感じるが、代わりにフレコンパックの山々が迫ってくる。

放射能でふるさとを奪われ、土地をおわれ仕事を失い家族離散も余儀なくされた福島の人々。悪いことは何一つしていない。住んでいて普通に暮らしていただけなのに。

それなのにその責任は誰がとるのだろうか。本当に悪いのは原発政策を進めた政府や事故を起こし防げなかった東電にあるのに、政府も東電も住民に寄り添った対応は何一つとっていない。セシウム137の半減期は30年、今と変わらぬ状況はまだまだ続くのだ。

避難区域が解除されても、避難先での7年以上もの暮らしが故郷への帰還をためらわせる。立派な校舎や校庭があっても、子どもたちの歓声は小さくしか聞こえない。以前の活気や歓声が戻るには、あと何年先になるのか誰も分からない。3・11から時が止まったままの無人の学校が多く存在する一方で、飯舘と浪江の新校舎に児童生徒数の急激な増加は望めない。しかし、福島教師はたった2人の生徒でも、数10Km離れた二つの学校を行き来しても弛まぬ教育実践を続けている。

福島は今を見つめ続けることも大切と思う。

みずおか俊一さんを国会へ



日退教、都退教協は、みずおか俊一さんを、参議院選挙候補者として推薦することを決定しました。

憲法9条などの改憲を目論む安倍政権をストップするためには、7月に予定される参議院選挙で3分の2をしめる改憲勢力の議席を過半数以下にする必要があります。また、教職員の超勤問題、子どもたちにゆたかな学びを保障するためには、教職員出身のみずおか俊一を国会に送ることが不可欠です。

みずおか俊一さんは、教育=誰でも学べる社会、くらし=安心して働ける社会、平和=平和に暮らせる社会をめざす政策をかかげています。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

編集後記

- ◇ 昨年は、年金が据え置き。マクロ経済スライドによる年金減額分は繰り越されました。今年は0.6%増ですが、繰り越された分と合わせて0.5%分が差し引かれ、わずか0.1%の微増にとどまりました。政府の基幹統計の改ざんが明らかになり、賃金統計すら怪しくなっている中で私たちは何を信じ、自らの生活を守ればよいのか。安倍政権には早々に退陣してもらいたいものです。
- ◇ 統一地方選挙、参議院選挙が近づいてきました。改憲を許さないためにも今回の選挙は重要です。都退教協は、区議会議員選挙では、東京教組組織内予定候補、足立区の「**おぐら修平**」さん、品川区の「**あべ祐美子**」さん、参議院議員選挙では、日教組の組織内予定候補「**みずおか俊一**」さんを推薦しています。みずおか俊一NEWS、後援会入会カードを同封いたしましたのでご協力をお願いいたします。
- ◇ 「日退教通信」と「東京高退連ニュース」を同封いたしました。「都退教協だより」とあわせてご愛読くだされば幸いです。
- ◇ 沖縄では政府と米軍の傍若無人な振る舞いが横行しています。辺野古新基地を強行する政府に対し沖縄県は埋め立ての承認撤回をしましたが、沖縄防衛局はその執行停止を申し立てました。24日には、辺野古埋め立ての賛否を問う県民投票が行われます。都退教協は、「止めよう！辺野古埋め立て国会包囲実行委員会」の要請にこたえ、国地方係争処理委員会に中立・公平な審理を行い、執行停止の取り消しを求める団体署名を送付しました。また、県民投票に取り組む沖縄の退職者の仲間に激励のファックスを送りました。
- ◇ 三寒四温とはいえ、寒い日が続きますが、会員の皆様、インフルエンザの猛威に負けず、元気で春をお迎えください。(谷口記)